

美術教育における写真活用の一考察

北御牧村写真プロジェクトから

三 澤 一 実*

Photograph Utilization in Art Education: "The Kitamimaki Village Photograph Project"

Kazumi MISAWA

今日、図画工作・美術科の授業ではデジタルカメラの普及と共に写真を使った実践が増えてきている。指導要領では表現の活動として扱われているが、この写真を、表現手段としてではなく、「撮る - 見る - 語る」の一連の鑑賞活動として捉え直したときに、写真実践は自己および外界を認知していく学習の有効なツールとしての活用が提案できる。それは、写真実践を通して、自己を取り巻く社会の事象、自然の美しさ、また、日頃気に留めないような事柄や、視覚化しにくい文化なども写真に置き換え目に見える形として提示できるからである。よって、美術のみならず自国の文化を大切にする教育に於いて、また生き方を考える学習に於いて効果的な手段として大いに活用したい。本論では筆者が企画した長野県北御牧村で行われた写真プロジェクトをもとに、美術教育の視点から教育における写真の役割を一考察として述べていく。

はじめに

今日、我々を取り巻く世界は映像にあふれている。一日のうちに映像メディアを通して私たちの目に飛び込んでくる情報の量たるや半端ではない。それらはテレビ映像だけでなく、インターネットなどの電子媒体、携帯電話などにより提供され続けている。この刻一刻と流れてくる映像情報によって私たちの生活も常に変化を余儀なくされている¹。このことは私たちの知っている世界がその情報を頼りに作り上げられた“知っている世界”であり、自らの体験を基にした“知”だけの世界ではないことを意味する。このことは、子どもたちは現実世界の把握が不十分な分、映

像を介して入ってくる情報やテレビゲームなどのヴァーチャルな世界に大きく影響を受けてしまうということになる。

その情報を仲介する映像メディアの最も古いものが写真である。この写真は19世紀に生まれてこの方、芸術的表現手段として、また時代や出来事の記録手段、そしてマスメディアと共に情報伝達手段として進化発展してきた。この映像メディアとして歴史ある写真を教育に生かす視点で捉え直すと、自己や社会の事象、自然の美しさ、また、日頃気に留めないような些細な事象や、視覚化しにくい文化などを目に見える形として私たちの目前に提示することができる。この写真による現実世界の把握は、美術のみならず、自国の文化を大切にする教育に於いて、また、生き方を考える学習に於いて効果的な手段として活用する

* みさわ かずみ 文教大学教育学部学校教育課程

ことができるのである。本論では筆者が企画した長野県北御牧村で行われた写真プロジェクトをもとに、教育における写真の役割を一考察として述べていく。

美術教育と写真

1. メディアと実践の中から

写真の特徴はリアルな映像による再現力にある。その一瞬を切り取って固定された映像は時間の経過を経てもその瞬間の状況を鮮やかに蘇らせる。それは「そこに-かつて-あった」ものを生き生きとイメージとして再現し、ゆっくりと我々の身体に刻み込んでいくことをしてくれるのである。

「明るい部屋の謎 - 写真と無意識」の著者であるセルジュ・ティスロンはその序文で写真を撮る意味を「撮影の瞬間に感じられた様々な感覚、情動、身体状態 - だが、あまりにも速く別の感覚、情動、身体状態によって追い払われてしまう - を、後に再び見いだしたいということなのである。」³と述べ、写真を改めて見ることで「映像を眺め、それについて語ることによって、私たちは、自分があまりにも性急に生きた出来事の記憶を呼び起こし、そうして自分のリズムでその出来事を消化＝同化することができるようになる。」⁴と述べている。ティスロンは人々が写真を愛好する心理を、時間のリズムが人間の身体のリズムを越えてしまったという現代社会が抱える問題点に起因すると理由付けている。そして、さらに「写真を映像として考えるだけではなく、一つの実践としても考えること」⁵と言及している。つまり、写真に撮りたい対象を見つけ、カメラを構え、シャッターを押す、そしてでき上がった写真を見る。その写真について語る。ここまでが一連のプロセスとして写真の実践となるのである。セルジュ・ティスロンの言う写真実践を参考にすると、教育において、写真は単なるメディア論を越えて、

自己及び外界の認知にかかる時間を撮影者自身に還元してくれる手段となり、そして、写真に固定させた一瞬をゆっくりと同化させる手だてをもって教育に活かせる貴重な手掛かりを見出すことができるのである。

2. 学習指導要領と写真

平成10年度版の中学校美術学習指導要領及び平成11年度版高等学校指導要領芸術編、美術、で新しく映像メディア表現が指導内容として加えられた。特に高等学校の指導要領では「A表現」において「映像メディア表現」の分野が、「絵画・彫刻」「デザイン・工芸」と並立して設けられ、美術として学ぶ主要な分野の一つとなってきた。高等学校美術1 - 映像メディア表現の解説に、「中学校美術における学習を基礎とし、伝達・交流のための視覚的な表現能力を一層育成するため写真、ビデオ、コンピュータ等を使って、基礎的な映像表現の学習をする。」⁶と記されている。

さて、ここで映像メディアに関する内容が、小・中・高等学校を通してどの段階でどのように示されているかみてみたい。

中学校における位置づけでは1年次で「A表現」(2)デザインや工芸などに表す活動」の内容の中に「伝えたい内容を図や写真・ビデオ・コンピュータなどで効果的で美しく表現し伝達・交流すること。」と示されており、小・中・高等学校を通して初めて学習指導要領の内容に登場する。解説では「写真は変化していくもの、動くものを写し取ったり、アングルを変えて写し取ったりできる便利な映像メディアである。時刻や時の流れ、四季の移ろいや、形やポーズ、表情などの面白さを伝えるのに簡単に利用しやすく、簡単に写せるカメラの普及によって学校教育の中でも手軽に扱えるものとなってきた。」と述べ、以下具体的指導の例示がされている。この内容は伝達・交流の手段として、写真による作画

というよりも写真をコミュニケーションの手段として利用するというものだ。絵や彫刻などに表現する活動としては、第2学年及び第3学年になってから扱われる。解説の「写真による表現」には次のように書かれている。「写真などの表現においては、ただ写すだけや記録としてではなく、被写体の何に、どのように興味を持ったり、感動したのか、何を訴えたいのかなどを考え、効果的に表現するために構図の取り方、広がりや遠くを近くに引き寄せたり、ぼかしを生かしたりするなど効果的な表現を工夫するためのレンズの絞り、ライティングなどの効果、手ぶれ防止などの扱いを含めた機材の適切な使用についての基礎知識や技術の習得もある程度学ばせる必要がある。写真を一枚の独立した作品として考えることのみならず何枚かの組み写真として物語性をもたせることもできる。」と書かれている。

デザインについては「- 様々なものを対象として新鮮なアングルから写し、それを編集したり構成したりして伝えたい内容のデザインに活用する能力を育てる。」とある。

小学校においては内容の記述はないが、「指導計画の作成と内容の取り扱い」の「(3) 材料や用具に関する事項」のなかに「また、用具としてコンピュータ、写真機、コピー機などの機器の利用については、児童が身体全体の感覚を働かせ身をもって経験する表現活動が基礎であるという考え方から、機器を中心にして児童の表現を考えるのではなく、いろいろな用具の中の一つとして扱い、児童一人一人の発想や構想などの能力の育成を図るために利用することが大切である。」¹⁰とし、安易に映像メディア表現を推奨することなく児童中心の表現活動を保持している。

さて、高等学校から小学校からまでの映像メディアの写真についての記述を簡単に追ってみたが、ここに2つの問題点が浮かび上がってくる。それは、指導要領では表現手段及び

道具としての活用方法と技術的な側面を学ばせながら、表現能力を高めることを中心に述べられているが、この指導要領に示された内容を系統的に捉えたときに、小学校から中学校への移行がスムーズでないことが挙げられる。次に「鑑賞」において写真鑑賞については特記されず、好意的に読み取れば作品鑑賞という文言の中の作品に写真も含まれていると解釈しなければならないことである。

このように美術教育においては写真の扱いはあくまでも表現手段として扱われており、ティスロンの言う「実践」によって写真を写すときに感じた様々な身体的状態や、感情、感覚などを消化＝同化することの重要性については触れられていない。むしろこの消化＝同化の作業は美術という教科性の外に存在するのであるのか。筆者はこの役割は美術教育が担うべき役割を負い、美的感性を高める基礎的学習として位置づけられ、小中学校では鑑賞の活動に相当し、撮影という活動を通じた鑑賞活動と考えるのである。

3. 鑑賞活動としての写真実践

学習指導要領によると、写真は芸術的な純粹表現と、デザインの目的を持った情報伝達、及びコミュニケーションツールとして捉えられている。特に今回の改訂で中学校の美術科では教科性を強く打ち出し、実質的な内容を重視したカメラの使い方や画面構成の仕方などの表現技術を学ぶ方向にシフトしている。しかし、学校教育で写真を扱う意味は映像メディアに慣れ親しみ活用できる力としてメディアリテラシーの育成のみを目指すのではなく、形式的な陶冶として、美的な感性を育み、写真によって、常に自己の生き方を捉え、社会のありよう、自然の美しさや素晴らしさなどを理解し、よりよい世界を作り出すエネルギーに還元していくこと。つまり、よりよく生きていくために写真を活用した実践を学校教育で学ばせることも必要なのではな

かるうか．そのためには撮る・見る・語るという制作と鑑賞の一体化した写真実践がどうしても必要となるのである．

たとえば、写真について語る取り組みは、私たちがスケッチによって対象を捉えるのと同様に意味を持つ．気軽にシャッターを押すという行動はスケッチによりもはるかに情動的な、感性的な行動である．だからこそ、その映し出された映像について、改めてゆっくりと咀嚼し、撮影時に身体に湧き上がった感覚を思い返しなが、自ら写した写真について語ることが自己及び外界を意識する重要な学びとなってくる．このことは、小学校においても身体性を喚起させる写真の実践として捉え直すと、指導要領の解説にかかれた「児童が身体全体の感覚を働かせ身をもって経験する表現活動が基礎である」ことを考慮した活動として位置づけられるのである．

レンズを通して見えたもの．それを自分が撮った．その時自分は何を感じたか．－この一連の思考のプロセスが「自然，自己，社会の関わりなど考えること」¹¹⁾を自分の体験を通し実感していく作業になっていくのである．そのためにも写真を撮ることと写真を見ることを切り離すことなく、自ら撮った写真について状況を思い出しながその時の思いや自分を取り巻いていた外界の状況について語る活動を重視すべきである．

4．写真の集合体からみえるもの

筆者は以前、中学2年生を対象に総合的な学習の時間の地域課題発見の手だてとして写真を使ったことがある¹²⁾．その取り組み内容は、レンズ付きフィルムを各自持たせ、登校途中や家の回りで気になったものを写してくるというものだ．そして写した写真の中から気に入った作品を1枚選ばせ撮影の理由を添えて全生徒の写真を掲示し鑑賞会を行った．生徒が写した写真は決して美術的に優れた作品ばかりではなかったが、一人一人の目が捉

生徒がレポートに使用した写真の内容

航空公園の池	畑	駄菓子屋(3)	老人ホーム(2)
公園の池	花	東京医業(会社)	病院
公園の遊具(2)	風景(2)	公園とビル	ネオン
航空記念館	緑	公団住宅(2)	公民館
日本庭園公園(2)	ゴミ(16)	住宅(3)	消防署
公園の蒸気機関車	森林(13)	自動販売機(2)	交番
遊具飛行機(19)	林の中のゴミ	送電線	武道館
航空公園(3)	不法投棄	犬の糞	ミュージアム(文化)
航空兵の像	風景(2)	無人販売	ホール(5)
フリーマーケット	中央公園の鳩	里芋畑	航空公園駅
ト風景	猫	新所沢駅	新所沢駅(3)
モニュメント(2)	グッピー	ロータリー	所沢駅
西武園遊園地(3)	ハムスター	向場中	車のライト
西武球場周辺	茶(2)	西宮小	交差点(2)
西武ドーム(3)	キウイ畑	北小(3)	道
中央公園(3)	農地	北小のかまど	自転車
モニュメント(2)	鳥不思議な家	愛宕神社(2)	放置自転車(8)
ムーミンの彫刻	身近な風景	北野天神	駐輪禁止の看板
銀杏の木(3)	高層マンション	神社(4)	スクールゾーン
しゅろ	(2)	馬頭観音	交差点
もみじ	電線	寺	西武線(4)
林	犬	地藏	ところバス
竹林	標識(2)	リサイクル地蔵	
野生のキジ	プロペ通り	中国帰国者定着	
草花(4)	街	促進センター(2)	
空	観光案内	看板(3)	
中央公園の緑	砂川堀(10)	消防士	



写真上：気になった写真を貼ってその撮影した理由を書いたレポート。右頁はその写真に写した内容を中心に据えたイメージマップ。
写真下：レポートを貼りだし付箋により意見交換。

えた地域の姿がそこにはしっかりと写っていた。この取り組みにより今までおぼろげだった地域の姿が、生徒が写した写真の集合体を通して浮かび上がってきたのである。

例えば、同じ公園をテーマに写した写真でも写し込もうとした表現主題は人によって異なり、公園の成り立ちや公園の管理について興味を示した生徒や、公園のごみ問題、公園にいる鳩、植生、遊具、利用者などその視点はまちまちである。しかしこのどれをとっても公園が内包する要素であり、これらの要素を一つずつ明らかにしていくことを通して、より公園の姿が生き生きと立体的に描き出されるのである。一つの対象を多視点で見ることで、その対象がよりいっそう深みを増して目前に現れてくるのである。このように写真を撮る・見る活動は生徒の気づきを簡単に記録し視覚化した情報として私たちの眼前に提示することができるのである。また、私たちはその提示された写真を見る・語ることによって交流し、撮影者自身が気づかないことも他者の視点から学び、対象に対する把握をより深化させながら提示された問題を相互に共有していけるのである。そのためには写真について語るという過程がどうしても重要になってくる。

また一方で、個人の認知に関わる作業として写真を捉えた場合、写真の集合体は自己の発見の手助けとなる。撮影時には何となく気になったという曖昧な動機による撮影は、後から写真を見て振り返ることにより、なぜその対象に引かれたのかを検証することができる。気になったものを写すという情動的な写真の取り方は、我々の日常生活も曖昧な判断にあふれていることから考えるとごく自然な行為である。しかしこの曖昧ながらも自分にとって気になる存在は、写真として固定された映像を集合させたときに、その総体から浮かび上がってくる共通した“私の存在”に自ら気づくことをさせてくれるのである。写真

の良さは、「何となく気になったもの」に対して気軽にアクションを起こし、後々気になったものの存在についてじっくりと時間をかけて消化＝同化できることではなからうか。デジタルカメラの出現により、今までは構図を考え抜いた中で1枚の写真を撮ってきた写真が、感覚的に何枚も撮影し、後で気に入った作品を選択できる時代となってきた。この選ぶという作業は、自分の意識の所在を明確にしようとする試み、そして、写真を通して心ひかれる曖昧なものの存在に気づく手だてとなってくる。この曖昧なものの視覚化が、他者との交流の中で単なるコミュニケーションを越え、人間理解や文化理解、そして新たな文化を生成していく創造の行為へと繋がっていくのではないのだろうか。

北御牧村写真プロジェクトに見る 写真の果たした役割

1. 北御牧村写真プロジェクトとは

北御牧村写真プロジェクトは、平成15年10月から平成16年6月の8ヶ月間、長野県の東部に位置する人口約5,700人の北御牧村全村民を対象に展開されたユニークな美術プロジェクトであり、筆者の企画によるものである。対象となった北御牧村は政府が進める合併推進政策の流れを受けて、平成16年4月1日に隣接する東部町と合併しその名を消した村である。この企画の意図は、合併を機に村民一人一人が写真を撮ることで形として目に見えにくい地域文化を視覚化し、共有することである。つまり写真を介し、村民自らが漠然と捉えている村の良さや自然の美しさを再確認し、村民全員で地域に根ざす文化を検証し、その価値を共有し、自信と勇気をもって新たな文化を創造的に作り出していく契機にしたいと考えた企画である。

北御牧村写真プロジェクトの内容は、作品制作プログラム、教育普及プログラム、鑑賞

プログラムの3つのプログラムから構成されている。このプロジェクトの狙いは身近な写真という表現手段を用いて、村民一人一人から見た地域の文化（世代観、価値観、地域性、村民性など）を浮かび上がらせていくとともに、このような美術活動が自分たちの中に流れる共通理解としての地域文化を自ら探り確認しながら、「村」について捉え直していくこと、つまり自己確認として写真が有効な手段になることを実証しようとしたものである。

2. プロジェクトの内容

プロジェクトの全体構成を把握するためにプロジェクトのおもな出来事を時系列で並べてみる。(右表参照)

2003 8月	実行委員会立ち上げ
9月	フィルム、参加要項配布(1750戸)
	撮影開始
10月	写真講座開催(2回) 写るんですの使い方放映(みまきケーブルテレビ)
11月	地区別写真講座開催(3地区) 大木道雄ワークショップ(小学校)
12月	佐藤時啓講演会(共同制作説明会)
1月	佐藤時啓共同制作
2月	橋正人笑顔の写真リレー本格スタート
4月	佐藤時啓ワンダリングカメラプロジェクト 大木道雄ワークショップ2
5月	大木道雄撮影 一人1枚作品回収、展示準備
6月	北御牧村写真プロジェクト展(5日~20日) シンポジウム「写真に見る地域文化発見と創造」 パネリスト 辻村哲夫(東京国立近代美術館館長) 玉村豊男(作家) 細江英公(写真家) 柳沢幹夫(実行委員会委員長) 関川憲生(長野県企画局) 司会 筆者



写真：フィルム配布のための袋詰めをする実行委員



写真：講師を招いて写真講座を開く。

写真上：佐藤時啓氏との共同制作に取り組む村民(上)とその作品(下)



写真上：シンポジウムのパネリストの皆さん。
写真下：展覧会風景14日間で2,000人の来館者があった。

3. アンケートによる調査

アンケートは、作品展に一人1枚を出品した人の中から任意に抽出した354人に対し行った「撮影に関するアンケート」と(抽出率11.3%)、会場に見に来た人の中から1,275人に協力いただいた「展覧会場アンケート」(回答率65%)を実施した。

展覧会に出品された写真総数は6,273点。内訳は、村民一人一人が平成15年10月から平成16年5月までの8ヶ月間に撮影した村の風景の中から1枚を選び出品した「村民一人1枚写真」3,144点、作家との共同制作作品1,568点、テーマ別展示作品1,561点の総計6,273点である。

(1) 撮影に関するアンケートから

撮影に関するアンケートでは、まず、Q5の「今回写真を撮って感じたこと」についての回答を見てみたい。回答では写真を撮って何も感じないと応えた人は5.5%である。

アンケート項目と回答率

Q1. 写真はよく撮りますか	
よく撮る(月1本以上)	10.1%
たまに撮る(年に数本)	42.5%
ほとんど撮らない(年1本以下)	47.4%
Q2. 写真を撮るときに困ったことは	
撮りたいものが見つからない	34.7%
思ったように写真が撮れない	43.7%
写真を撮る時間がない	21.7%
Q3. 写真を出すとき困ったことは	
気に入った写真がなかった	53.4%
人前に出すのが恥ずかしかった	21.0%
出したい写真が沢山あって迷った	21.0%
Q4. 写真プロジェクトのような取り組みは	
必要ない	21.4%
たまにはあった方がよい	73.1%
Q5. 今回、写真を撮って感じたことは	
写真を撮ろうとすると回りのものを気にして見るようになった	25.9%
今まで気づかないものや風景に気づいた	29.4%
写真を撮ることが楽しかった	15.2%
写真を撮ったり見せたりして家族や近所の人とふだんよりも会話が出来た	16.2%
人はどんな写真を撮っているか気になった	24.6%
あらためて自分の住んでいる地域の良さや自然の美しさに気づいた	28.8%
何も感じなかった	5.5%

このことは、撮影者のほとんどが写真を撮ることで何かしらを感じたということである。それを踏まえ、～を考察したい。

回答 写真を撮ろうとすると回りのものを気にしてみるようになった。25.9%について

この回答から考察できることは、撮影に際し「未来に残したい北御牧の風景」とテーマを設定したことにより、身の回りの世界を注意深く見渡し、何を撮ろうか観察を深めていったことが推測できる。また、写真を出さなければならないという課題に対する意識も身の回りの観察に向かわせた要因であろう。日常生活の中に、写真を撮るための題材探しという新たな視点が入ってきたことは、普段何げなく見過ごしていたものや、美しいと思いながら立ち止まることなく時間の中で忘れ去っていく事象に対し、立ち止まり写真に記録しようとする意志がより強く働き、結果として自分を取り巻く外界の観察につながっていった。

たとえられる。

回答 今まで気づかなかったものや風景に気づいた。29.4%について

回答 より、外界に対する観察は、必然的に今まで見過ごしていたものや身近な風景から美しさや面白さなどを撮影対象として発見することにつながっていった。その結果、発見が更なる観察を引き出し、今まで見ていながら目に留まらなかったものの存在に気づいていく。また、カメラはファインダーを通して現実の世界から切り取られた世界を覗かせてくれる。視界を制限することにより、今まで周囲に埋没して見えてこなかったものの存在や美しさなどが見えてくる場合もある。

回答 写真を撮ることが楽しかった。15.2%について。

この数字については様々な読みとり方が出来る。楽しいと感じた15.2%の人達は、写真によって今まで気づかなかったものや風景に気づいたり、写真を介して生まれる人とのコミュニケーションに楽しさを感じたりしたことだろう。しかし残りの85%の人は写真を撮ることに慣れていないと共に撮りたいものが見つからなかったり、うまく撮れなかったり、楽しさを感じるための要素に不足していたとも考えられる。また、写真を撮らなければならないという“ゆるやかな強制”が気持ちの上で負担になったことも考えられる。

回答 写真を撮ったり見せたりして家族や近所の人とふだんよりも会話が出来た。16.2%

写真に慣れてくると、他者に見せたり、発表したりしたいという気持ちは誰でも持つものである。また、共通のテーマのもと写真を撮ったということもこのようなコミュニケーションを生み出した要因であろう。

回答 人はどんな写真を撮っているか気になった。24.6%

自分が撮影すると他人の作品も気になってくる。一つは撮影している人自身に興味を持

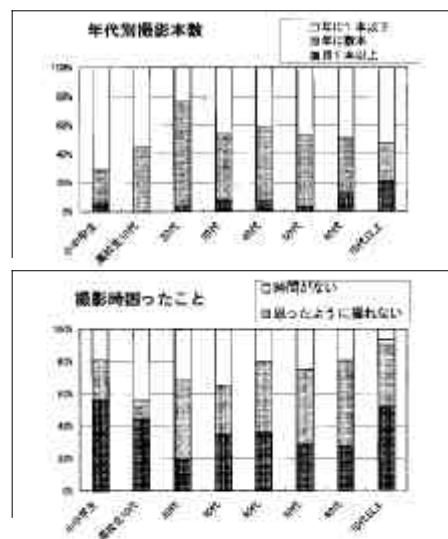
ちどんな写真を撮るのだろうかという人間に対する興味と、もう一つは純粋にどんな作品が出てくるか知りたいという内容に関する興味である。この回答の考察は非常に難しい面があるが、今回の場合は、写真を撮ることに慣れていない（年に1本未満47.4%）、撮りたいものが見つからない（34.7%）などのアンケート結果から推測すると、自信のなさの裏返しという側面も見えてきそうである。

回答 改めて自分の住んでいる地域の良さや自然の美しさに気づいた。28.8%

この回答からは写真を撮ることによって、日頃見過ごしていた「身の回りの良さ、美しさに気づいた」という気づきが、自分が住んでいる地域の良さの確認まで昇華していったと言える。地域の良さという広がりとは、「身の回りの良さ」に比べ他者をも含む広がり和社会性をもっている。

その他の項目から

アンケートの集計表を見てみると、「撮るときに困ったことは」の問いに「撮りたいものが見つからない」34.7%「写真を撮る時間がない」21.7%と、答えた人が合わせて半数以上（56.4%）いる。また、その数字に近い数字で「ほとんど写真を撮らない」（47.4%）人達がいる。下図は年齢別の割合である。



(2) 展覧会場でのアンケートより

展覧会場にて、来館した、1,275名に対して、展覧会の写真を見て感じたことをアンケート形式で聞いてみた。

その内容は当てはまるものすべてに をつける質問と自由記述欄によるアンケートであり次の表のような数字がでた。

展覧会の写真を見て感じたこと（当てはまるものすべてに をつけてください）	
楽しく写真を見る事が出来た。	977人 (77%)
写真を見て地域の良さを捉え直すことが出来た。	549人 43%
写真を見ていたら自分も写真を撮ってみたくなった。	203人 16%
一人一人の写真に込められた思いを感じ取ることが出来た。	645人 51%
たまにはこのような企画があったらいいなと思った。	491人 39%
多くの写真を見て写真の見方が深まったような気がした。	332人 26%
写真を見ても何も感じなかった。	0人 0%

(3) 自由記述欄からの回答から

展覧会場のアンケートの自由記述欄に書かれていた感想は主に次の4つに分類することが出来る。（該当件数362 / 1,275件）

企画、実行委員の取り組みに対しての賛辞と今後の取り組み（継続）への期待など（245件）

写真を通して何かに気づかされたなど具体的な作品展に対しての感動など（94件）

展覧会や企画に対しての要望など（21件）

取り組みに対してのクレーム（2件）

上記の から主な感想を以下に挙げる。

50代男性 出品者

写真を通しても他人の感じ方捉え方が自分とは違うものだった。

40代女性 出品者

写真を見て「家族」という単位の価値観、重要性を強く感じました、近頃同じ歳の女の子が女の子をカッターナイフで...という悲しい事件があり、心が痛みます。全て「家庭」

がスタートとなると思います。今、子育て中の私ですが、「家族」「家庭」を大切にしていきたいと思いました。

40代男性 出品者

これだけ多くの写真を見ることはふだん無いので見きれませんが、1枚1枚からは撮った人の思いが伝わりとても興味ある写真展でした。

30代女性 非出品者

大地と空と人々と、写真から誇りを感じました。

40代女性 非出品者（他市）

どの写真を見ても、豊かな自然と、おじいちゃんおばあちゃんや家族とのふれあいの中で育ってきた素晴らしい人の表情が見られて心がほのぼのしました。

10代女性 非出品者（県外）

この地区の人々の目がとても素敵だと思いました。写真に自分は何を写したいかかなりはっきり見えていてとても面白く、今回のこのプロジェクトは子どもも飽きずに作品を見れるとてもよい機会だと思います。

20代女性 非出品者（県外）

写真を撮った方々の被写体に対するやさしい思いが伝わってきたように感じました。これだけ多くの宝物を一度に見ることができてよかったです。

3. 展覧会から見る写真の果たした役割

今回の北御牧村写真プロジェクトを通して、



多くの人が「未来に残したい北御牧の風景」として出品した共同作業風景の中から1枚。「稲の苗床づくり」

参加した人々にどのような変容が見られたのであろうか。この変容を探ることが、このプロジェクトで写真の果たした役割になると考えられるが、しかし、変容は鑑賞者の内面で発生し、表象として出現するまでには時間を要する。また、表象の確認には困難を要する。そこで、先述のアンケートの調査項目と自由記述欄の記述から展覧会の果たした役割を、1. 自分と他者。2. 同化と批評。3. 地域の発見と文化の確認。4. 概念的世界の再構築という観点から推察してみたい。

(1) 自分と他者

「写真を通しても他人の感じ方捉え方が自分とは違うものだった。」(50代男性)の言葉のように、写真はカメラという機器がレンズを通して物理的に対象をフィルムに像として焼き付ける事によって出来上がるため、一般的に同じ対象物を写した場合、その作品に違いが出るとしたらそれは撮影者の感性に基づく美的な価値判断以外にありえない。この同じ対象を写すという行為は、地域とか文化などという概念的なテーマの場合、その象徴として捉えられた様々な場面が写真に写し出される。写真に写し出された対象の幅は、自己と他者のものの見方、感じ方の差であり、この表現の差こそが、自分が自分であることの証明になってくる。その自分らしさを確認するためには、同じテーマを同じ場で比較展示できる鑑賞活動が必要である。

この鑑賞の場を設定したことにより、今回の写真展は同じ地域に暮らしていて顔なじみの関係を越えて、改めてお互いの人間理解、つまり個性を認め尊重する姿勢を再確認するきっかけになったのではなかろうか。

(2) 同化と批評

鑑賞者は写真を見ることを通して、日常私たちが、瞬間瞬間で感じているが次々とわき上がる様々な感情や、日常的な仕事やしなけ

ればならないことに駆り立てられて十分に味わいきれない自分自身の感じている - または感じたい - 感動を、写真に定着された映像を見ることにより、過去に体験したことがある似た様な体験がイメージとして出現することを体験する。そのイメージを鑑賞者は改めてゆっくりと咀嚼し直し、その時の感情を、消化 = 同化することができる。そのゆるやかな咀嚼の時間はまさに自分自身の感じ方や、感じている自分自身の発見そのものになる。

さらに、この咀嚼の時間は鑑賞者に、写真の内容を自身の感性と価値観のフィルターを通して同化していくと同時に写真を批評できる力を着けていく。それは単に技術的な批評ではなく、過去の経験から喚起された身体性を伴った批評力であり、その批評眼が自他のよさを確認し他者を認めていく力となっていく。

(3) 地域の発見と文化の確認

展覧会で一人一人の写真に込められた思いを感じ取ることが出来たと答えた人は51%になった。写真は一瞬を切り取り思いがけない映像を提供してくれる。よって、その面白さのみに目を奪われ、また圧倒的な作品数で、写真を撮った撮影者の思いまで感じることができなかった鑑賞者もいるだろう。日頃より立ち止まってじっくりと作品を鑑賞する体験に慣れていない鑑賞者にとっては、作者の心情まで思いめぐらすような時間をかけての鑑賞は少なからずの労力が必要であったと推察できる。

今回、写真展を見た人の多くが楽しかったと答えている。そこに映し出された風景は決して非日常の風景でなく、日々私たちが目にしている風景である。そこには鑑賞者の私たちが村の文化として確かめたい世界が、言い替えれば良い意味で鑑賞者の期待を裏切らない要求通りの写真が出されているという構造が存在する。

柴田和豊は、「メディア時代の美術教育」の中で現代社会の世界観について次のように述べている。「近代以前においては、生まれた地域内で生涯を送る人も少なくなかった。そのような人達の世界イメージは良くも悪くも実際の体験と重なり合っていたに違いない。それに対し、私たちは世界について多種多様のイメージをもつ。メディアが送り続けるのである。しかしそのことによって現代人のも



写真上：「野沢菜踏み漬風景」 撮影 滝沢菊代
写真中：「秋の手伝い」 撮影 宮坂美代子
写真下：「うちの宝」 撮影 小林宗雄

つ世界像は体験の裏付けを失う。一面では世界は拡大するが、他面では自己と世界の必然的な繋がりは消えていく。」¹³

北御牧の村民も時代の変化の中で、変わりつつある地域についてどこかしら危機感を持っていた。地域の行事が減ってきたこと、機械化や会社勤めのサラリーマンが増え共同体意識が薄れてきたこと、かつては子供たちが歩いた山道を今は車で送り迎えをしていることなど、現象として現れてきた世代間の隔絶。変化に戸惑いながらも地域に根差す人と人との繋がりを確認しにくくなってきた現在。そして、町村合併の問題。これらの問題に対してその不安をかき消すかのような村民一人一人の写真の集合。柴田和豊が言う自己と世界との必然的な繋がりが確認できる写真を鑑賞者はそこに見出し、自分が生きている北御牧村という文化を持った世界との必然的な繋がりを（変わらないものを）写真によって確認し、安心感を得ているのではないのだろうか。

今回の写真展は、村民一人一人が日常の些細な事象を写真に取り上げたことで、誰もが理解し共感できる世界がそこにはあふれていた。その共感できる価値観が村の文化であるということ、写真1枚1枚を通して実感できる写真展であった。そこには日々見ている身近な自然や一人一人の生活がほほえましく、また、たくましく写し出されている。

(4) 概念的世界の再構築

北御牧村という地域を写した、3,144枚の写真は、村民自身が概念としてもっている北御牧村の自然や人々の生活の姿を具体的に、直観的に把握することを可能にさせた。そのことにより鑑賞者は、自身の思い描いている北御牧村の姿と他者の目を通して象徴的に写し出された北御牧村の姿とに共通する価値観を見出すことができるようになった。そこに共感とともに北御牧村という一つの共同体の中で共有できている価値観に喜びを見出して



いる。その共有できた価値観が地域の文化として鑑賞者には見えてくるのである。

3,144枚の写真は全村民の6割にしか当たらないが、その3,144枚の写真の存在は、実際に村に生活する人々の多さと個性豊かな一人一人の姿を、美術館の閉ざされた空間の中で実感させるには十分である。その空間を支配した写真の数は、村の人口を直観的に把握させ、その人たちの存在を写真の内容と共に一層意識させた。そして、地域の自然や風景、行事などが改めて美しいものとして一人一人の視点を通して、そこに生き生きと発現させたのである。鑑賞者は、今まで概念として抱いていた北御牧村を、これらの写真を通して疑いようのない表象として私たちの前に出現していることに気づいていったのである。この象徴として直観的に切り取られた風景は私たちに北御牧村を捉え直す機会を与え、古い概念を新たな概念に書き換え、新しい地域の姿を描かせるのである。

写真の教育的活用の可能性

- まとめにかえて -

写真はコンピュータを使った映像加工が容易になった時代において、更に表現の可能性を持つようになってきた。しかし、その反面、写真が持っていたリアリティーは薄れ、それは現実社会とかけ離れたものとなってきた。今や写真展も、デジタル加工した作品とそうでない作品と分けることが難しくなり、かつ

ては差別化された写真のアナログとデジタルの論争もナンセンスとなりつつある。

このように写真が事実を描写するという信頼性から夢や理想を描く道具へとその役割を広げつつある今日、改めて写真の現実世界を写し取る働きに教育的役割を見いだしてみたい。なぜならば、今日のように私たちにとって実感のない世界が情報によって作り出される中で、いかに現実の世界を捉え、その現実世界から感受する体験を広げていくかが子どもたちの成長にとって特に必要なこととなるからである。そのためには、今まで述べてきたように自己や外界を認知する作業において、写真の実践はその補助的役割を十分に果たす手段となりうるのである。それは、1. 自己に対して。2. 外界に対して。3. 概念的世界観に対して。私たちの生きている世界を生き生きと捉え直すことを可能にさせるのである。

さて、このような現実世界の把握には、日頃から写真を撮ること見ることの一連の活動を数多く重ねる実践が必要である。撮影は授業時間以外でもよい。必要なのは写真鑑賞の時間である。少ない授業時間を工夫して短時間の鑑賞会を行ったり、掲示物の利用など学校における教育活動のあらゆる機会を通じて取り組みたい。撮影者自身に写真に固定させた一瞬をゆっくりと自分自身に同化させる指導と、他者との価値観の交流を図りたい。

美術教育では写真の可能性を語るときに、コンピュータと結びついて新たな表現を生み出す可能性を語られることが多い。しかし美術が技術や知識のみを身につけるだけのものではなく、美的情操を育み感性的な現実把握により人間の豊さや理想や夢の創出を可能にする教科であるとするならば、写真表現は、その一方でバランスを保ちながら、今薄れつつある現実世界の把握を、写真を撮るという実践を通して、現実世界に対し自己を開いていく大きな役割を担わなければならない。すなわちここに、教育に還元できる写真の可能性

が見えてくるのである。この写真による外界の把握は決して新しいものではない。柴田和豊は、かつてのように自然と一体化した生き方がしにくい現代社会の問題点として「人々と世界の有機的な結びつきは姿を消し、感応する力は失われていく。そのことは、人間的な世界を構想するための基本的な能力の喪失を意味するのだ。」¹⁴と述べている。人々と世界の有機的な結びつきを確認する手段として、カメラをもつことで今まで漠然と見過ごしていた日常風景を意識して見つめ直すようになり、自分を取り巻く外界に対して敏感なアンテナを張り巡らせ、その結果、五感の働きが鋭く覚醒し、撮影においてはかすかな風の揺らぎや場のにおい、こぼれ落ちた光などにも感応できるようになる。

そこには身体性として自らの足で対象を発見するための動きがあり、身をかがめたり、背伸びしたりしてアングルを決め息を止めて撮影する身体や、対象を撮影するために太陽の位置を気にしたり、風の勢いを感じたりする知覚がある。このような心と体の連動による一連の行動は表現というよりも表現という確認手段を伴った鑑賞活動である。写真はカメラという機器が介在することで直接外界との接触が出来ない分、私たちはじっくりと振り返る時間を必要とするのである。写真を撮ることを表現手段のみに捉えることなく、鑑賞と表現の一体化した活動。セルジュ・ティスロンの言う写真実践、北御牧村写真プロジェクトのような文化発見の手だてとして、改めて写真の可能性を捉え直したときに、「今まで気づかなかったものや風景に気づいた」「あらためて自分の住んでいる地域の良さや自然の美しさに気づいた」という自己や外界との関わりが学びとして見えてくるのである。

人間が豊かに暮らすためには現実的な世界をいかに感性豊かに捉えていくかが重要である。その把握ができて初めてバーチャルな世界が我々に夢と現実の橋渡しをしてくれる。

今回の写真プロジェクトの感想の中に「合併しても何も変わることがないと感じていたが、写真展を見ていて改めて北御牧村がなくなっただんだということに気づいた。」という感想があった。頭では理解できているものが、実際にそこに住む人々の写真を見ることで、その良さや大切にしているものを、そして、失ったもの（変化したもの）の姿を浮き彫りにすることができたのである。私たちはカメラという第3の目を持つことで外界を新鮮に捉えていくことができる。デジタルカメラや携帯電話の普及によりカメラが一人一台となる時代、写真を撮る機会も撮影枚数も格段に増えてきた。美術教育では、対象を生き生きと捉える表現と共に、撮った写真について語ったり、写真を読み込む鑑賞活動を深めたい。そのためには日頃から写真を撮る実践を行い常に外界に対して感性を開いていける人間の育成に写真の活用を考えていくべきであろう。

参考文献

- 1 養老孟司：「手入れ文化と日本人」白日社2002 pp.101-128参照
- 2 Serge Tisseron 青山勝訳：「明るい部屋の迷 - 写真と無意識」人文書院2001,p.49, 「バルトは『それは-かつて-あった』をあらゆる写真のノエマとしたが、……」
- 3 同p.1.
- 4 同p.2
- 5 同p.173
- 6 文部省：高等学校学習指導要領解説 教育芸術社、1999, p.83
- 7 文部省：中学校学習指導要領解説美術編、開隆堂出版、1999, pp.68-69
- 8 同p.54
- 9 同p.78
- 10 文部省：小学校学習指導要領解説 図画工作編、日本文教出版、1999, p97
- 11 文部省：高等学校学習指導要領解説 教育芸術社、1999, p.102
- 12 三澤一実：「中学校における単元開発の事例」、平成11年度『総合的な学習に関する研究紀要

第2集「自ら学ぶ力を育てる指導法の工夫改善

・所沢教育センター編, 2000, pp. 63-83

三澤一実:「地域の中から学習課題を発見する
取り組み」(株)ぎょうせい「総合的な学習実践事
例集」, 2000, pp. 711-717

13 柴田和豊:「メディア時代の美術教育」国土社,
1993, p.30

14 同 p.27